三池大変災三周年
遺族・被災者 守って闘う

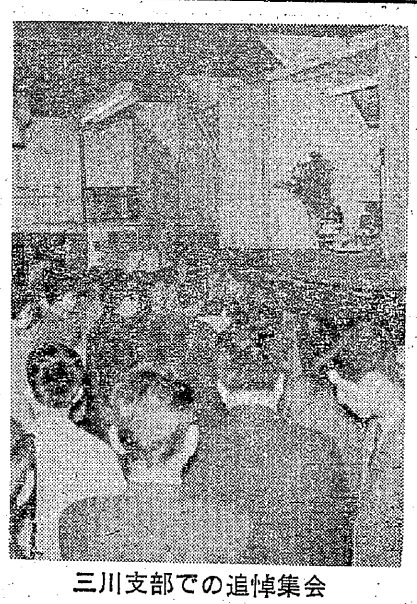
十一月九日、爆発から三年目を迎えて、政府、会社の一片の反省もない冷酷な攻撃に対して新たに闘いの決意を誓って、霊前に午後一時から追悼集会を行なった。

集会には炭労各支部代表、県下各単産、地区労代表が集り、遺族・被災者と組合代表の多数参加の中で涙もあらたな供養が行なわれた。

三池労組の決意として塚元書記長は「再び災害を起こさない闘いをくみ、組合員みんなで遺族・被災者を守っていきます。そしてこの三川爆発の責任をとろうとしない政府と三井鉱山に対し、あくまで責任追及を行なう」と誓いの言葉をささげた。その後三川坑口で再び焼香し、大爆発の午後三時十五分に一斉に黙禱を捧げた。

組合員は、九日各鉱とも三番方の方別ストを行ない、入坑点検を行なうとともに、坑内外全職場で抗議の職場集会を行なった。

われわれは、生命と生活を守るため、あくまで三井鉱山の責任を追及してゆこう。


三川支部での追悼集会

反響呼ぶ〝CO闘争〟
「会社こそ生涯を保障すべきだ」
三化の組合員も怒る

CO患者に対する労災補償打ち切りの撤回をめざすたたかいが、日増しに広く反響を呼び起こしていることは周知のことだが、さらに見きわめようと友誼労組の一つ―三化労組をたずねると、ちょうど来合わせた職場の一組合員は語った。

「そりゃア、職場の空気は一般には低く、同情の程度をぬけ切ってはいませんが、しかしCO患者の家族の人々と交流して、一度でもナマの声をきいた私としては、断じてこのまま見過ごすことは許されんと思います。もちろん現在は政府の仕打が問題になってはいますが、第一このようなCO患者とその家族を救うことは、このような大事を任でかした三井の会社側の責任ですよ。会社側こそこれらの人々の生活を保障すべきです。それもしないで、全責任を政府になすりつけるような態度はもっての外です。

それにこの問題は決して三池の労仂者だけに限ったことではなく全労仂者の問題です。とくに私のところなどついこの頃、無水フタル酸工場で、大爆発が起きたばかりでしょう。もしあれが昼間にでも起きていたら、仂く者の間には相当な犠牲がでていたはずです。会社の合理化攻撃がこれから深刻になっていくにしたがい、事故もますます多くなっていくに相違ないことを思えば、あくまでCO患者に対する労災補償を要求していくことは、まさに全労仂者のたたかいだと思います。

とにかくCO患者の人やその家族の人々との交流を一回でも多くもつ、そしてナマの声をひろげていく……これが第一です」

産炭地集会開かる

十月二十六日、北海道と九州で「失業反対、炭鉱労仂者と産炭地を守る大集会」が行われ、各単産代表が、二十六日と二十七日に三池現地での調査と分科会による討議を行った。

全体会議につづいて、分科会は合理化問題、失業問題、自治体問題、教育問題に分かれて討議し、三池現地調査では、ガス患者に対して労災補償打切り通告が出された直後でもあって、特にガス患者の実態を知るため、労災病院をはじめ熊大病院を見舞った。また集会では、ガス患者に対する医療保護打切りへの抗議文を特別採択、会場でカンパが集められた。

「第二の幹部は何考えているのだ」
あきれる三煉の組合員

三煉労組の一組合員は、こんどのCO患者の補償打切り問題について次のように語った。

「まだなおりもしない人を〝治ゆ〟とか〝固定化した〟とかいって補償を打切るなどということは言語道断です。その言語道断なことには目をつぶっておいて、返って自分の組合に所属する患者に圧力を加えて、補償打切りをのませようとする第二組合幹部の態度はなっとらんですよ。さすがに東圧や水俣の第二組合でさえ『なんちゅバカなことをするもんか』と、批判しとるそうじゃなかですか」

あわれな新聞記者バイ

▼…熊本日日新聞の十六日の朝刊四面に「CO患者めぐってビラ合戦」という記事が出ていた。

一酸化炭素中毒患者への労災補償打ち切りをめぐって三池労組、同新労組のビラ合戦が活発化し、市民は「真実はいったいどこにあるのか」と首をかしげている。

これがその内容であるが、「これは熊日の新聞記者がつくった記事としか思われんが、どっちのビラが真実をうったえようとしているか、読めば一年生の子どもにでもわかるぞろうに、それがわからぬとはあわれな人間バイ」、と評判の悪いこと。

帰ったオルグの声

こんどCO患者家族の会の人々は、手分けして炭労傘下の各ヤマをとびまわって、CO患者をめぐる問題の真実をうったえて帰ったが、このCO闘争の意義を拡げる上で〝ナマの声〟こそが、どんなに力を発揮したかをよく示している。これはそのオルグの人々が伝える声である。

やっぱりナマの声こそが…
室野井スエノさん　桑原　サダヱさん

九炭労傘下の組合をまわって、昨年、三池青年部が〝地底の叫び〟をもってオルグした所は、非常に良く理解してもらった。

〝ガス患者に対しても関心が深く私たちの訴えも熱心に聞いてくれた。そして炭鉱だけでなく、もっと他の単産にも広く実態を知らせる必要があるのではないかという意見も出た。

しかし、小さなヤマでは、将来に対する不安が大きく、どうしたらヤマがつぶれないですむのかというのにせいいっぱいのようなところもあった。また主婦も内職に行っている人が多く、どこも同じような状態になっているのだと思った。

「現場ではいつ災害が起こるかわからない状態だから、闘わなければならない」という組合員が多かった。

しかしCO患者の実態は、私たちが行ってはじめて判ったのではないかと思った。

初めて判ってもらつた実態
松永スミ子さん

九炭労傘下の組合へ、私たちの実態を訴えてまわりました。

全体的にどこでも質問されたのが、なぜ同じ災害にあいながら、第二組合は一緒に闘わないのか、ということでした。そして私たちの訴えに対して、「新聞やテレビのニュースだけでは、自分たちのところに大きな災害がないと、あれは三池のことだと思って、あまりピンとこなかった。ところが、ナマの声を聞いてはじめて実態が判り他人ごとではないと思った」と感想をのべました。

私たちも、中小ヤマをまわってみて、脱衣場もないようなところもあって、労仂者が虫けらのように扱かわれているのだと思ったものです。そして私たちの問題は、決して私たちだけの問題でなく、いまどこの職場でもすすめられている合理化攻撃の中で、労仂者のギリギリの問題なのだと思いました。

関心の高さに驚いた
北海道の報告

北海道の交流から帰ってきた石原まさ子さんと後藤よし子さんに聞くと、「とにかく同じ炭鉱労仂者だから、私たちもできるだけのことがしたい。きついでしょうがぜひ最後までがんばって下さい、と返ってはげまされて帰ってきた」と、ほぼ次のような話しだった。

「私たちは三つに分かれて大小のヤマヤマをまわり、くりこみ場や社宅などで直接うったえてきました。むこうでついこの間住友弄別のガス爆発があり、たずねたあるヤマでは、事故で組合員の方がお亡くなりになってちょうど初七日にあたったり致しましたせいもあって、私たちが訴えるまでもなく、みなさんの関心の高かったのに驚きました。とくに社宅での主婦のみなさんとの交流のときなんか、お世話なさる人がなんべんも解散を宣言されても帰ろうとされなかったですが、こんなことははじめてのことだと組合の方も驚いておいでした。そして向うの疑問は、みいけのみなさんはいま同じ問題をもっていながらなぜ一つになれないのか、ということで、事情を話してもなかなか理解できないふうでしたがとにかくカンパをいただいたり温かいもてなしをうけたり、心強い思いでした」。

産炭地を守る大集会に参加して
宮浦支部　平田光男

二十六日午後二時より福岡御供所小学校講堂で全体会議をやり、その後ただちに現地調査に行くことになりました。私は遠賀地区に配置されとくに閉山になった山を調査することになりました。そしておもに日炭高松と大正鉱を見聞し廃坑になった山のわびしさ、また合理化の恐しさを痛切に感じました。

大正鉱は未払賃金約七億の問題をかかえ家族ぐるみのたたかいがすすめられ、雇用の安定が叫ばれていました。高松は知れているようにわずかの坑口を残しボーダーラインとして管理方式炭鉱とされ労使協調ムードの感で一杯でした。これを独占資本ならびに国家独占のムリ押しの、しかも死に物狂いの体制的合理化の嵐を真向に受けているからであろうか。

労仂基準法を有名無実のもとに仂かされ、しわよせが保安無視、労仂強化となって行なわれている坑内で仂いている採炭夫でさえ次の番方にくい込む残業をし、間接夫の人は二十四時間そのまま仂き続けている状態だ。

現在の炭鉱労仂者は自分たちの弱点におぼれ、資本の弱点をえぐろうとせずお互が苦しみ悩んでいるに過ぎない。

主婦の労仂により鍵っ子はもちろん、青少年対策が低賃金と政治のヒンコンにより生じてくる。町を繁栄させるためには労仂者が仂いてこそはじめて芽生えてくる。雇用の安定叫ぶとともに地区住民との連帯ならびに理解学習を深め町ぐるみの組織の反合理化闘争として運動が発展し、産炭地のみじめさを打開していくことができるし、主婦が労仂しなくてもよい最低賃金制を、労仂者全体の力で勝ち取りたい。

―青婦部、三川坑口で決起集会―

三興燃料への
御用命は……
電話②8119番
③5392番へ